

薔薇の文化史（その一）——「花の中の花」⁽¹⁾

*
中尾 真理

要 旨

バラは栽培の歴史も古く、特に西洋では「花の中の花」として古くから特別に愛されてきた。本稿の目的はバラの栽培、その利用、鑑賞など、バラをめぐる文化を歴史的にたどることにある。バラはギリシア・ローマ時代には主に薬用、香料として利用され、キリスト教のもとでは神秘的な表象として使われた。イギリスでは「ばら戦争」に見られるように、バラが国家の紋章としても使われ、シェイクスピアやR・バーンズなどの詩にも歌われ、広く親しまれている。

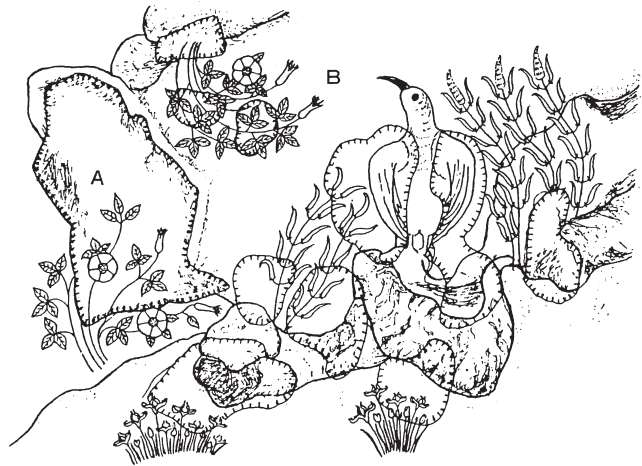
野生種を含め、バラの品種は多いが、古代から十九世紀の始めにかけて、ヨーロッパで栽培されていたバラは、わずか五系統にすぎなかった。十八世紀に四季咲きの中国バラが伝来したことにより、バラの栽培は飛躍的に発展し、バラの品種も爆発的に増えた。

本稿ではバラの文化史（その二）として、ヨーロッパ、特にイギリスを中心に、バラ革命までを扱う。中国とヨーロッパのバラの交流、日本のバラについては次回にとりあげる予定である。

(I) 西洋の薔薇

「ギリシア・ローマ時代」

バラは西洋では花の中の花であり、古くから親しまれてきた花である。栽培の歴史は古く、ペルシアでは紀元前十二世紀ごろすでにバラを祭祀や香料、薬として利用していた。⁽²⁾ギリシアでも紀元前の相当に古い昔から薬用、香料用、観賞用に栽培していた。⁽³⁾それを裏付ける最も古い例としてよく持ち出されるのが、ミノア (Minoan) 王朝時代、クノッソス宮殿の「青い鳥の壁画」である。そこにバラと思われる花が描かれているのだ。クレタ島では一八九八年から一九三六年にかけて、アーサー・エヴァンズ (Arthur Evans) によってクノッソス宮殿の発掘が行われた。その時に発見されたフレスコ画の壁画の中に、一羽の青い鳥とともに、バラと思われる花が二株描かれたものがあつた (図A参照)。この花は真紅の斑点がある、黄金色の花で、花卉が六枚あり、葉も三枚の小葉からなっている。花は、地面に直立した株と、高いところからツルを垂れ下げている株の二種類がある。どちら



図A：クノッソス宮殿の青い鳥のあるフレスコ画
大場秀章『バラの誕生』（中公新書）より。

にも円筒形の蕾があつて、バラに見えなくもないが、ほんとうにバラかどうかは疑わしい。⁽⁴⁾これをめぐっては諸説論議があるようで、ここに描かれている花がバラと断定されているわけではない。しかし、もしこれがバラの花だとす

なく、アキレウスが親友パトロクロスの火葬の準備を入念に整える一方、仇であるヘクトルの遺体は放置したままであるのを女神が哀れみ、「バラの香油」を塗つたというだけである。

．．． Zeus's daughter

Aphrodite kept them from his body

night and day, anointing it with oil

ambrosial, rose-fragrant, not to let

rough dragging by Achilles rip the skin . . .

(The Iliad, Book xxiii, 185-7)⁽⁵⁾

ゼウスの御娘アフロディーテが、昼となく、また夜となく、犬どもの近寄らないようにし、薔薇の薫りの、神々しい香油を塗つて、引き摺り廻され、さんざん傷がつくのを防いだ。

(『イリアス』二三卷185行目、呉茂一訳)⁽⁶⁾

れば、それはヨーロッパ最古のバラの絵だということになり、紀元前一七〇〇年ごろにはバラが栽培されていた(あるいは自生していた)証拠になる。

バラについては、ギリシアの詩人たちが歌っているのが、むしろ、確かな証拠である。紀元前九世紀から八世紀頃の詩人ホメロス(Homer)は『イリアス(The Iliad)』の二三卷一八五〜七行のところ

「薔薇の薫りの神々しい香油」では「バラの花」を歌つたとは言えない。そもそも、この偉大な叙事詩には樹木や果樹はたくさん出てくるが、バラに限らず観賞用の花についてはほとんど触れていない。それは同じホメロスの『オデュッセイア(The Odyssey)』でも同じで、夜が明けるときに「薔薇色の指(rose-red fingers)⁽⁷⁾」の暁の女神⁽⁷⁾が登場するが、バラの花そのものの記述はない。オリヴ、蔦、ブドウ、イチジク、梨、林檎という果樹の名前をあげることがあつても、ホメロスは樹木や草

花の装飾的な美しさについては歌っていないのである。

ギリシアの詩人で、バラの花を詩にしたのは、女性詩人サッフォー（Sappho, BC610?-580?）や紀元前六世紀の抒情詩人アナクレオン（Anacreon, c.582-485BC）である。サッフォーは紀元前七世紀ごろ、エーゲ海のレスボス島に住んでいた。サッフォーは林檎の茂みに泉がわき、いたるところにバラが木陰を作っている涼しげな庭のことを歌っている。

Therein cold water bubbles through apple-branches,

And the whole place is shadowed by roses,

And from the shimmering leaves the sleep of enchantment comes
down:⁽⁸⁾

林檎の枝の間に冷たい水が湧き出で／あたり一面、薔薇が木陰を
なす／木漏れ日の間から心とろける眠りが降り注ぐ……

アナクレオンはイオニアの詩人で、生きる喜び、恋愛、女性、酒、バラを讃え、ブドウの種子が喉に詰まって八十五歳で死んだが、最後まで人生を楽しんだと言われている。⁽⁹⁾彼の薔薇賛歌は有名である。

花摘みて、手に取ればやさし、身体に押しあてれば匂いもやさし。宴会やディオニソスの祭りに薔薇なくていかにせむ。薔薇色

の指の夜明け、薔薇色の腕のニンフ、薔薇色に頬染めるアフロデーテーと詩人は呼びかける。詩心の無きにも薔薇は嬉し。病人を癒し、（花輪になって）死人を守り、時を寄せ付けず。優雅なる老いの日に薔薇は青春の香りを保つ

「アナクレオン風55」⁽¹⁰⁾

同じ詩にバラの由来が歌われているが、それによれば、アフロデーテーが泡立つ海から誕生した時に、ゼウスの頭からは戦いの女神アテナが現れ、大地からはバラの花咲く若枝が飛び出した、ことになっている。⁽¹¹⁾バラは、つまり、アフロデーテー（英語名ヴィーナス）の誕生の副産物として生まれたわけである。

バラがヴィーナスの花であるという俗説はここから生まれた。たとえば、イタリア・ルネッサンスの画家ボッチェリ（Sandro Botticelli, 1445-1510）が描いた「ヴィーナスの誕生」には、画面に白いバラが散らされているが、バラとヴィーナスの結びつきが、十五世紀には、既に固定イメージになっていたことがわかる。

ところで、このアナクレオンのバラ賛歌は実際にアナクレオンが書いたのではなく、紀元前六〇〇年から紀元一〇〇〇年の間に、ギリシアの詩人たちが「アナクレオン風」に模して書いた詩の一つである。酒と女性とバラを愛でる「アナクレオン風の詩（Anacreontea）」は後世の文学者に大きな影響を与えた。「夏の名残のバラ（Last Rose of Summer）」で有名なアイルランドの国民詩人トーマス・ムーア（Thomas

Moore, 1779-1852) もそのひとりで、「アナクレオンのオード」を英訳して、「アナクレオン・ムーア」と呼ばれた。前述のバラの賛歌もムーアの英訳で親しまれたと言ってもよい。「夏の名残のバラ」は日本では「庭の千草」として親しまれているが、本来はバラを歌った詩である）

アナクレオンとアナクレオン風の詩は、イギリスでは古くから知られており、ムーアの前には、清教徒革命の頃の王党派の詩人で随筆家のエイブラハム・カウリー (Abraham Cowley, 1618-67) や、同時代のトーマス・スタンリー (Thomas Stanley, 1625-78) も英訳している。最近ではオンラインで古い文献が公開されているので、異なる英訳を容易に比較することができる。¹²⁾ 快樂的なアナクレオンの詩は、禁欲と節制を尊ぶキリスト教のモラルとは相容れないはずだが、それはイギリスの若者にとって、そう縁遠い世界ではなかった。彼らには学問としてまずギリシア、ローマの古典を学んだという下地があった。わが国で学問と言えばまず漢文を学び、中国の書物を読んだようなものである。ギリシア語、ラテン語の習得が、中世以来、ヨーロッパの男子教育の中核をなしていたという事実を忘れるわけにはいかない。文法、学校、パブリック・スクール、大学を通じて、男子の教育はギリシア語、ラテン語の文法を学ぶことから始まり、ギリシア、ラテンの古典を読むことに終わった。学問とは即ち、ホメロスやプルタルコス、ヘロドトスやツキジデスを学ぶことであったのだ。この状況はローマ時代に始まったが、ローマ帝国が衰退し、キリスト教が人々を精神的に支配す

るようになっても、変わらなかった。ラテン語は教会の公用語となつたからである。ラテン語は教会の権威を保つために、カトリック教会においては二〇世紀の初頭まで公用語として使われていた。宗教改革が、聖書を自国の言葉で読みたいという願望から始まったことはよく知られている。ラテン語で書かれた「古典」にはキリスト教とは対照的な、多神教の文化が息づいていたが、それは「古典」「教会の公用語」「學術共通語」という大義名分の下に不問に付され、こうして二つの対照的な価値観が継承されてきたのである。ラテン語は中世以来近代に至るまで、知識人たちの共通語であり、學術語だったが、近世以後も二十世紀に至るまで、基本的にその姿勢は変わらなかった。

もつとも、古典を学んだのは男子だけの話で、女性にはラテン語も古典も学ぶ機会とは与えられていなかった。¹³⁾

このような古典の知識は知識階級の教養としてヨーロッパ全体に広く浸透していただけでなく、古典絵画や芸術、建築などを通して、間接的に、女性や教育を受ける経済的余裕のない農民や貧しい労働者たちにも伝わったことだろう。カトリックであれ、プロテスタントであれ、ヨーロッパ社会はキリスト教という大きな権威のもとに縛られていたが、このように二つの価値観を合わせ持つことで、抜け道や広がりを持つことができたという効用は無視できない。キリスト教のモラルに照らしては、およそ許されないようなことも、「神話」や「古典」であれば許された。たとえば、一般人の裸体画を描くなどおよそ考えられなかった時代にも、ギリシア神話の女神であれば、裸体画を描く

ことができた。禁欲・節制を求める窮屈な社会にあっても、教育を受け学校に行く余裕に恵まれた男性たちは、それとは違う世界のあることを知っていたのである。もともと教会が学校の経営に関わっていた例は多いから、そうした教育の現場で、酒、恋愛、快楽を歌ったアナクレオンの詩が教室で直接、教えられることはなかっただろう。だが、古典の素養を持った男性たちが、ギリシア語やラテン語で、あるいは、カウリーやムーアの英訳を通して、ギリシア、ラテンの詩人の世界に親しんでいたことは十分に考えられる。

「有用植物（薬草）としてのバラ」

サッフォーやアナクレオンなどの抒情詩人の例はあっても、ギリシア、ローマではバラは鑑賞用というよりも、なによりもまず、有用な植物だったようである。アリストテレス (Aristotle, BC384-322) は植物の構成、色、実、性質について述べているところで、「ザクロの実やバラの花弁は、始めは白であるが、最後にはそのうちにある汁がその成熟によって色づけられるので、色が変わり再び紫色となり深紅となる」(アリストテレス『小品集』¹⁴)と言っている。バラについてはそれだけで、バラの花が美しいと言っているわけではない。そもそも哲学者であるアリストテレスは、バラにも花の美しさにも関心を示していないのである。アリストテレスの弟子で哲学者のテオフラストス (Theophrastus, c.372-287BC) は『植物誌 (Enquiry into Plants)』で植物の種子や花の色や繁殖について述べたあと、低木のところ (第六巻)

でバラについて述べている。バラにはさまざまな違いのあることを述べた後で、こう続けている。

大部分は花弁が五枚だが、十二枚か二十枚もあるものもあり、もっと多くあるものもある。「百弁バラ」と呼ばれているものさえあるという話がある。そのようなバラはほとんどがフィリッポイ (マケドニアの町) の近くで育つ。というのも、その地の人々はバラがたくさんあるパンガエウス (Pangaeus) 山でそのバラを手に入れて、植えているからだ……一般には、既に述べたように、色も香りも場所次第である……あらゆるバラの中で最もよい匂いのバラはキュレネ (アフリカ北岸のギリシアの植民都市) のバラである。それゆえ、この地のバラから作られる香水は最も香りがよい。¹⁵ (Book VI, vi, 3)

……その国 (エジプト) では、バラやニオイアラセイトウ、その他の花は、わが国のものより二ヶ月も早く咲き、しかも、わが国の花より長期間もつ。少なくとも短いということはない。¹⁶ (Book VI, viii, 5)

ローマ人のプリニウス (Gaius Plinius Secundus, Pliny the elder, AD 23-79) は、『博物誌 (Natural History)』で、ギリシア人テオフラストスの説をほぼ踏襲し、さらに詳しく述べている。プリニウスは『博物誌』

表1：プリニウス『博物誌』

第1巻	参考文献表
第2巻	数学的・計測学的宇宙論
第3～6巻	地理学・民俗学
第7巻	人間学・生理学
第8～11巻	動物学
第12～19巻	植物学・農業・園芸
第20～27巻	薬用植物
第28～32巻	薬用動物学
第33～37巻	鉱物・(薬)・芸術・宝石

の中で、植物を扱った第二二巻から第二七巻において、野菜の薬効、草本類の薬効、栽培樹の薬効、野生森林樹の薬効、野草の薬効、さらに薬草について述べており、バラにも言及しているが、『博物誌』全体(全三七巻)からみると、その扱いは決して大きいとは言えない。(表1参照)注

リニウスはバラのほかに、ユリ、スイセン、スマレ、キンセンカ、サフランをあげている)
花冠は名譽の象徴で、冠婚葬祭にも使われたが、頭痛や二日酔いを抑える薬草としての効用を期待して、宴会でも使われた。プリニウスは他にも、ぶどう酒の風味付けやサラダにして食べるなど、さまざまバラの利用法を記述している。バラは(まだ蒸留する技術がなかったために)油に浸してローズ・オイルにし、それを軟膏や目薬として用い、まったく害がないところから食卓に塗布するという贅沢にも使われた。¹⁹⁾

プリニウスは言っている。

目すべきは、第二一巻で「花と花冠(chapter, garland)」について述べていることである。

そこでプリニウスは、菜園で花冠用の花を栽培するのは、「言葉では表しきれないほど繊細な花の美しさのためである」と述べている。¹⁷⁾これはバラの効用だけでなく、バラの装飾性、芸術性に着目している点で注目される。彼によると、花冠は木の枝で作られる慣わしだったが、やがて花をとりどりに混ぜた多彩な花冠を編むようになった。花の冠はその美しさも香りもたった一日しか保てないがゆえに、貴重である。花の冠はやがて、金属で花を模造するようになったと、プリニウスは述べている。繊細な花の冠を編む花冠職人(garland-makers)も存在した。¹⁸⁾その花冠に使われる花として最初にあげられているのが、スマレやユリを置いてまずバラなのである。(花冠の材料として、プ

わがローマ人によると、最も人気のあるバラの品種は、ピラエネステ(ローマ東部の町パレストリナ)、カンパニア(中部イタリアの一地方)のバラである。ミレトス(小アジアのカリアの主都市)のバラを加える人もいる。それは花卉が十二枚を超えることはないが、燃えるような赤い色をしている。これに続くのはトラキス(ギリシア北東の古いテッサリアの町)種で、赤みが少ない。その次が比較的値の安いアラバンダ(小アジア西部の町)種で、白っぽい花卉をしている。最も安価なのは、花卉はとても多いのだが非常に小さい、とげの多いバラである・・・他方、花卉の多い種類には「百弁バラ」と呼ばれる品種があり、イタリアではカンパニア地方、ギリシアではフィリッポイ(マケドニア東

部、トラキアとの境近くにある町）の周辺に産する。ただし、そこは原産地ではない。（『プリニウス博物誌』植物薬劑編七九頁。²⁰）

全体はテオフラストスと似ているが、細部で微妙に違っている。バラの値段についても触れていて、バラの花が園芸作物であったこと、良質で安価な花卉を求めて、海外からも輸入していたことがわかる。この当時のバラは四季咲きではなく、一季咲きだったから、新鮮な花卉を長期にわたって確保するには、一つの地方からでは不可能だったのだろう。それで花期の異なる遠い地方からも集めたのだと思われる。テオフラストスの『植物誌』にあったフィリッポイの「百弁バラ」がここでも登場しているのが注目される。また、テオフラストスはアフリカ北岸にあったギリシアの植民都市キュレネや、エジプトのバラについて述べていたが、プリニウスは北アフリカやスペインでもバラの花が栽培されていたと述べている。

そのほか、本来のバラであっても土地によって左右される。キュレネ（アフリカ北岸のギリシア植民都市）にはとても香りの強いバラがある。それゆえ、そこではきわめて質のよい軟膏が得られる。ヒスパニア（現スペイン）のカルタゴ（現カルタヘナ）には、冬中咲く早咲きのバラがある。（『プリニウス博物誌』一八〇頁。²¹）

花卉は現在のバラのように多くはなく、おそらく五枚、またはそれ

以上であっただろう。「百弁バラ（hundred-petalled rose）」つまり「花卉が

百枚もあるバラ」と呼ばれるバラがあることから、花卉は多いほうがよく、香りが高く、赤い色の花がよいとされていたことが推察される。とは言え、花の大きさは現代のバラに比べて、かなり小ぶりであっただろう。ここにあげられた各産地のバラは、学者によって特定されている。諸説あるようだが、大場秀章著『バラの誕生』にあげられているものをあげておこう。（表2参照）

ローマ人のバラの利用について、A・W・ハットフィールド（A.W.

表2：プリニウスのバラ

プリニウスの記述	推定される種（学名）	プリニウスがあげている色・特徴
プラエネステのバラ	ローザ・ガリカ (<i>Rosa gallica</i>)	最も人気のあるバラ
カンパニアのバラ	ローザ・アルバ (<i>Rosa alba</i>)	最も人気のあるバラ
ミレトゥスのバラ	ローザ・ガリカ (<i>Rosa gallica</i>)	燃えるような赤
トラキアのバラ	ダマスク・バラ (<i>Rosa damascena</i>)	赤みが少ない
アラバンドのバラ	ローザ・アルバ (<i>Rosa alba</i>)	白っぽい
とげの多いバラ	ピンピネリフォリア・ミリアカンタ (<i>Rosa pimpinellifolia</i> var. <i>myriacantha</i>)	花卉が多いが、小さい
百弁バラ	ダマスク・バラ (<i>Rosa damascena</i>)	花卉が多い（百枚）

大場秀章『バラの誕生』（中公新書）35頁より作成。

Hatfield) が次のように要領のよい説明をしている。

ローマの人々はエジプトから船何隻分にも当たるバラをどんどん輸入し、シバリス人のようにバラの上で眠り、歩き、食事をした。また、バラをジャムや砂糖菓子にし、酔いを遅らせるために酒杯に浮かべ、さらに用心のために宴会の時にはバラの冠をつけたほどであった。バラのワインはその香水と同じように楽しまれた。キューピッド、ヴィーナス、バッカスなどの多くの彫像と同じように、ローマの花嫁、花婿はバラの冠をつけた。そしてローマの英雄や勝利者にはバラでつくった冠が与えられ、バラがまかれた小道を歩いたり、二輪戦車で往き来した。名誉、秘密、沈黙の象徴である白バラが宴会の席に吊るされるとき、すべての客は、出席者全員が秘密を守ることを誓っていると確信して話をし、ふるまうことができると考えられた。この習慣からひそかに、という意味の *sub rosa* (文字通りの意味は、バラの下で) という言葉が生じただけでなく、天井の中心の石膏の装飾であるローズ(円花飾り) のもとともなった。

(A・W・ハットフィールド『ハーブの楽しみ』²²⁾

このように各方面で多彩に利用されていたからこそ、バラは有用な植物で、重要な農作物であったのだ。とは言え、サツフォアやアナクレオンがバラの花の美しさについて歌っていることからわかるよう

に、バラは作物として畑で植えられただけでなく、庭に植えられ、鑑賞もされていた。プリニウスは畑での栽培法について述べる(『プリニウス博物誌』八〇頁)²³⁾ だけでなく、ユリとバラを混植した時に得られる素晴らしい効果についても言及している。

ユリはバラの最盛期に咲き始め、おもにバラの間に混ぜいれて、さらに華やぎを添える。(『プリニウス博物誌』八一頁)²⁴⁾

ロンドンのテート・ブリティッシュ美術館にジョン・シンガー・サージェント(John Singer Sargent, 1856-1925)の描いた「カーネーション、百合、薔薇」(1895)という有名な絵がある。百合の間にピンクの薔薇と紅いカーネーションの咲く幻想的な絵だ。白と赤の二種類の花が同時に咲く華やかな花壇は、ローマ人も知っていたのだ。

(Ⅱ) 教会との結びつき

【聖書のバラ】

聖書にバラは登場しない。唯一の例外は旧約聖書雅歌二章一の「シヤロンのバラ」だが、それも実はバラではなく、アネモネであったろうと言われている。「シヤロンのバラ (the Rose of Sharon)」というのは「シヤロンの野の名花 (the excellency of Sharon)」というほどの意味で、聖書を翻訳した人々、たとえばウィリアム・ティンダル(William

Tyndale, 1492?-1536) が美しい花と考えていたのがバラであったから、バラと訳したのでろうというのである (P・コーツ)⁽²⁵⁾。イザヤ書三五章一もかつては「砂漠は花を咲かせよ。野バラは花を一面に咲かせよ」と訳されていたが、現在、この部分は「野バラ」ではなく、「fields of asphodel」となっている。「asphodel」はギリシア神話に出てくる極楽の不滅の花であり、フサザキスイセンかイヌサフランだと考えられている。日本語の旧約聖書も、この箇所は「野バラ」ではなく、「サフラン」になっている。⁽²⁶⁾

【教会とバラ】

有用植物として花の王座を占めていたバラは、キリスト教の出現で、別の意味を持つようになった。バラの五枚の花びらはキリストが負わされた五つの傷を象徴し、赤いバラは初期の殉教者の流した赤い血を表すようになった。⁽²⁷⁾ カトリック教会の聖歌のひとつに

うるわしくも咲きいでにし

とげなきばらの花よ

たぐいなきその香りに

われらが心なごむ

みいつくしみ満ちあふるる

もろびとの母マリア (カトリック聖歌集三〇四番)

というのがある。純潔の聖母の象徴は、清らかな白いバラである。「マリアの連祷」(Litany of the Blessed Virgin Mary) ではマリアのことを「神の御母 (Holy Mother of God)」「思慮深き女 (Virgin most prudent)」「魂の器 (Spiritual vessel)」「象牙の塔 (Tower of ivory)」「平和の女王 (Queen of Peace)」とさまざまに形容して呼びかけていくが、そのひとつに「くすしき薔薇 (Mystical rose)」というのがある。「くすしき薔薇」は「とげなきばらの花」でもある。

カトリック教徒がロザリオの祈りに用いる数珠ロザリオ (rosary) は、バラの花冠のことであるが、ローマ人の愛したバラの花冠が、このような形でカトリック教会に残ったのは興味深い。バラは聖母と結びついて、神秘性が強調されるようになった。花びらの重なりあう円形の幾何学的なバラのモチーフが、バラ窓として、宗教建築に取り入れられるようになったのも、その一例である。(もつとも、ゴシック建築の花であるバラ窓について、OEDは一七七三年以前の用法を載せていない。もとはその形が似ていることから、車輪窓 (wheel window) と言われていた。⁽²⁸⁾ バラ窓については、必ずしもバラの花の形を意匠化したものと考えする必要はなく、東洋の影響や、キク、ハスの花の形を模しているという説もある。⁽²⁹⁾ しかし、一八世紀以後、車輪窓はバラ窓と呼ばれてきた) フランスのノートルダム大聖堂のバラ窓 (一二二〇年建立)、ランス、シャルトル大聖堂のバラ窓が有名だが、イギリスではヨーク大聖堂 (一二六〇年建立) のバラ窓、ウェストミンスター大寺院のバラ窓がよく知られている。また、四句節 (Lent) の第四日曜

日 (Rose Sunday) に、ローマ法王が君主や都市、聖堂に教会への貢獻の証しとして授ける「黄金の薔薇 (golden rose)」という習慣があるが、このバラは金属 (黄金) でつくった工芸品のバラで、文字通りシンボルである。この習慣はレオ九世の、一〇四九年に始まった⁽³⁰⁾。

その他にも、バラと教会との結びつきを示すものとして、ヨーク大聖堂のチャプター・ハウス入り口の内側に刻まれた「バラは花の中の花、これは家の中の家 (UT ROSA FLOS FLORUM SOC EST DOMUS ISRIA DOMORUM)」という銘がある⁽³¹⁾。英語では教会のことを「神の家 (House of God)」と言う。ヨーク大聖堂のオンラインを見ると、ヨークよりほぼ三〇年前に建てられたウエストミンスター大寺院のチャプター・ハウスの床タイルの上にも、同じ銘が刻まれているという⁽³²⁾。「バラは花の中の花」という表現に、バラを花の代表とする見方がすでに定着していたことが読み取れる。

バラは意匠化され、教会建築に使われるだけでなく、生花が教会内にも飾られ、修道院の庭にも植えられた。修道院の庭には、蔬菜、果樹のほかにも、料理用、蒸留用、葉用のハーブ、葉草、儀式用装飾用の花が植えられており、その中には必ずバラがあった。バラは修道院だけでなく、世俗の屋敷の囲まれた中庭にも、トレリスやあずまやに絡ませて植えられた。そうした様子は、聖母像などの美しい彩色手稿 (マニユスクリプト) の絵の背景にしばしば描かれている。たとえば、一五世紀の北方ルネッサンスの画家マーティン・シヨンガウアー (Martin Schongauer) (1450?-91) の「薔薇園の聖母 (Madonna of Rose

Power)」には花園の芝生の台座 (turf bench) に幼児キリストを抱いて座っているマリアが描かれているが、マリアの背後には低い垣根があつて、赤いバラが絡み付いている。これは典型的な中世の庭のスタイルであった⁽³³⁾。他にも、多くの画家によって「薔薇園の聖母 (The Madonna of the Rose Garden, The Madonna in the Rose Garden)」という絵が一五世紀には多数描かれており、バラと聖母の組み合わせが人気の画題として定着していったことがわかる。

壁に囲まれた秘密の庭、そこに咲く薔薇の花、愛を求める青年の探究となれば、それは中世の寓意ロマンス『薔薇物語 (Roman de la Rose)』のテーマである。『薔薇物語』は一三世紀に広く流布した絵物語で、ギヨーム・ド・ロリス (Guillaume de Lorris) とジャン・ド・マン (Jean de Meun) による寓意物語の傑作である。前半の四〇五八行をロリスが一三三五年ごろ、後半をド・マンが一三六五―七〇年ごろに書いた。物語は「私」がある晩に見た夢、という体裁をとっている。「私」は「愛」の園に入り、そこにある「薔薇」の蕾に恋をする。苦労の末、「私」は「薔薇」にキスをするが、「嫉妬」と「悪口」が「薔薇」を塔に閉じ込めてしまう⁽³⁴⁾。最後に「薔薇」の蕾が摘まれて夢が終わる。宮廷の恋愛を歌ったこの物語は、フランスの物語だが、華麗な彩色細密画に描かれて広まり、中世ヨーロッパに多大な影響を与えた。

(Ⅲ) イギリスの薔薇

『王家の紋章』

イギリスの家庭で長く親しまれた園芸書ジョン・ジェラード (John Gerard, 1545-1612) の『植物誌 (Herball, or Generall Historie of Plants)』(1597) 第三巻は、バラについての、次のような記述で始まる。

薔薇という植物は、一面にとげがあるにもかかわらず、この世で最も荣誉ある花として位置づけるにふさわしく、つまらぬイバラの仲間として取り上げるべきではない。薔薇は、いかなる花と比べても、その美しさ、効用、かぐわしい香りの点で秀でているが、それだけではない。薔薇はわがイングランド王家の誉れであり、その紋章であるがゆえに、花の王者とするにふさわしい。ランカスターとヨークという二つの貴い家系を結びつけたことからわかるだろう。⁽³⁵⁾

(Herball, or Generall Historie of Plants)

ジェラードはエリザベス一世の大蔵大臣、バリー卿ウィリアム・セシル (Lord Burghley, William Cecil) の庭師だった。庭師は薬草を扱うから、薬剤師・薬種商でもあり、エリザベス朝時代には医者の一種とみなされていた。本業から言えば、ジェラードは外科医・薬剤師兼業の理髪師で、ロンドン一帯の「理容外科医協会 (the Barber Surgeons Company)」の幹部であった。シェイクスピア (1564-1616) の同時代

人でもある彼は、ホルボーンに立派な庭を所有し、当時、彼の名を知らぬものはなかったと言われている。⁽³⁶⁾ 冒頭で引用した『植物誌』は彼が管理を任されていた庭園の主人、バリー卿に献げられている。この『植物誌』は、オランダの園芸家ドドエンス (Rembert Dodoens) の *Strypium historie pnyptades sex* (1583) を借用しており、科学的に見てどうかと思われる記述も含まれている。⁽³⁷⁾ しかしながら、大判の美しい版画が使われていることもあって、広く一般に普及した。

さて、ジェラードは、バラが「わがイングランド王家の誉れであり、紋章であるがゆえに、花の王者としての位置を占める価値がある」と述べ、バラが王家の紋章であることに意義を見出している。バラはイングランドの象徴なのだ。⁽³⁸⁾

ジェラードはチューダー朝の二人の国王、エリザベス一世とジェームズ一世に仕えたが、イングランドの王家で最初にバラを紋章に使ったのは、プランタジネット朝のヘンリー三世 (在位1216-72) の王妃、プロヴァンス出身のエリアノル (Eleanor of Provence) である。エニシダ (*planta genista*) を意味するプランタジネット (Plantagenet) 王朝の四代目にあたるヘンリー三世は、「大憲章」で有名なジョン王の息子である。プランタジネット家はフランス系で、別名アンジュー王家 (Anjou) とも言った。美人で才女の誉れ高いエリアノルは白バラ (*Rose alba*) を自分の紋章 (emblem) としていた。それを息子のエドワード一世が受け継ぎ、イングランド王家の紋章としたのである。⁽³⁹⁾ エリアノルの次男エドモンドは初代ランカスター伯となり、プロヴァンスか

ら赤いバラを持ち帰って、紋章とした。その後、赤いバラを紋章とするランカスター家と、白バラを紋章とするヨーク家の間で争いが起こり、後にばら戦争 (The Wars of the Roses, 1455-85) と言われた。王位継承権をめぐるこの争いは、シエイクスピアの『ヘンリー六世 (Henry VI)』に描かれている。赤バラと白バラの争いは、ランカスター家のヘンリーが (ヨーク家の) リチャード三世を破り、ヘンリー七世 (在位1485-1509) となり、ヨーク家のエリザベスと結婚したことによって、ようやく決着がついた。ちょうどこの頃、ウィルトシャーの修道院の庭に、赤と白の両方の色の花をつける新しいバラが現れたというめ度たい話が伝わっている。⁽⁴⁾ ロンドンの国立肖像美術館 (National Portrait Gallery) に、赤と白の入り混じったバラを手にしたヘンリー七世の肖像画が残っている。

ヘンリー七世はチューダー王家を創設したので、赤と白のバラは、五弁の赤バラと白バラを組み合わせたチューダー・ローズ (Tudor rose) と呼ばれる紋章となり、チューダー朝の国王の表象として使われた。⁽⁴⁾ この有名なバラについては、ロサ・ムンディ (Rosa Mundi) とも、赤いガリカ・ローズの変種とも言われている。

以上のいきさつについて、栽培植物学者の中尾佐助は、「イギリス王室の紋章はバビロン以来の西アジア原産の栽培バラである」と言及、こう述べている。

このことは日本皇室の紋章がキクであることを連想させる。キク

クは中国で交雑によってできた花であり、奈良朝の頃に日本に渡来したが、それが紋章化して皇室の象徴になった。キクもバラも、ともども王室の紋になったが、渡来した花である。この偶然のよな一致は、花というものがときどきおどろくほどコスモポリタンな性格を発揮することがあるということの好例といえよう。

(『花と木の文化史』⁽⁴⁾)

『バラ・イメージの定着』

外来の栽培植物であったバラは、チューダー王家の紋章となっただけでなく、一般にも確実に浸透していった。バラは植物として存在するだけでなく、恋人や美女への呼びかけとして、美や快樂、栄光の比喩として、絵画や建築に、詩や芝居に、歌や民謡に、多方面で使われた。OEDによれば、英語の *rose* の起源はラテン語の *rosa* にあり、その *rosa* はおそらくギリシア語の *ῥοσά* から来たものだろうということ、初出は八八八年である。つまり、古英語が成立した時には、バラは既に存在していたわけである。

チヨースー以来、バラを歌った英語の詩や散文は枚挙の暇もないが、中でもよく知られているのは、ローバート・ヘリック (Robert Herrick, 1591-1634) の次の詩だろう。

Gather ye rosebuds while you may

Old time is still a-flying

And this same flower that smells today

Tomorrow will be dying.

‘To the Virgins, to Make Much of Time’

間に合ううちに、薔薇の薔を摘むがいい——昔から時は矢のよ
うに飛んでゆく／ここに咲くこの花も今日は微笑んでいるが、
明日は死に果てるのだ。

「時を惜しめ、乙女たちよ」(1648)

ここでは「バラの薔」がアナクレオン風の地上の快樂と考えられて
いる。この詩が書かれた時代——宗教戦争、清教徒革命、その後の内乱、
スペイン・オランダの脅威、疫病の流行、ロンドンに大火のあった時
代——を考えれば、この詩に託した「明日はわからない」という思い
も理解できよう。⁽⁴³⁾「バラの薔 (rosebud) は生命の薔であり、美なるもの、
善なるものへの希望である。

バラと「はかない人生」については、シェイクスピアも『真夏の夜
の夢 (Midsummer Night's Dream)』(1595-6) の中でアテネの大公シー
シアス (Theseus, Duke of Athens) に次のように言わせている。

But earthier happy is the rose distill'd,

Than that which, withering on the virgin thorn,

Grows, lives, and dies in single blessedness.

(Midsummer Night's Dream, Act I, scene i)

人に摘まれぬまま、ひとりで清らかに育ち／生きて、死んでゆく
野ばらより／香水になるほうがバラは世間的には幸せなのだよ
（『真夏の夜の夢』一幕、一場）

ここではバラは一人の乙女に喩えられている。シーシアスは結婚を
拒絶するハーミア (Hermia) に、棘で男性を撃退し、独身のまま野原
で一生を終えるより、摘み取られ、人の手で蒸留され、香水になる方
がこの世ではよほど幸せではないかと、結婚の幸せを説く。バラを栽
培し、改良し、加工して、香水やローズ・ウォーターとして利用して
きた歴史があつて初めて成立する、せりふである。

同じ『真夏の夜の夢』には、野生のバラも出てくる。イギリスには
花卉が一重で、白またはピンクの、よく生垣に使われる「犬バラ (dog
rose, *Rosa canina*) や、同じく一重、ピンク色で香りのよいエグラント
イン (eglantine, *Rosa eglanteria*) などの野バラが自生しており、自然
にいくらかでも目にする機会があつたと思われる。妖精の王オーベロン
(Oberon) が、妻のティターニア (Titania) の眠る場所を悪戯妖精の
バック (Puck) に説明する場面。

I know a bank whereon the wild thyme blows,

Where ox-lips and the nodding violet grows,

Quite over-canopied with lush woodbine,

With sweet musk roses, and with eglantine,

There sleeps Titania sometime of the night . . .

(*Midsummer Night's Dream*, Act II, scene ii)

向こうに堤がある、野生のタイムが風に吹かれ／桜草が伸び、蕘がうなずいている／頭上にはスイカズラが茂り、甘い香りの麝香バラと野薔薇が／蓋のようにおおいかぶさるところだ／そこでティターニアは夜、眠ることがある。

(『真夏の夜の夢』二幕、三場)

ティターニアの眠る堤には、野生のタイム、桜草、スマシレ、スイカズラとともに「甘い香りのマスク・ローズ(麝香バラ、Musk Rose, *Rosa moschata*)」と「野バラ(エグランタイン)」の天蓋ができてゐる。エグランタインは別名「sweetbriar」とも言い、香りがよい。一方、マスク・ローズは麝香の香りがするところから、そう呼ばれている。花の色は白から赤までいろいろである。麝香バラは、蔓性なので、絡み付いて天蓋状にするには具合がよい。バラ以外のタイム、スマシレ、スイカズラも香りのよいことで知られる植物である。

しかし、バラと言えば、一番有名なのはやはり、『ロミオとジュリエット』二幕二場のジュリエットのせりふだろう。

What's in a name? that which we call a rose,

By any other name would smell as sweet;

(*Romeo and Juliet*, Act II, ii)

名前が何だというの？ 私たちがバラと呼ぶあの花は、／名前がどう変わろうとも、甘い香りは同じでしょうに。

(『ロミオとジュリエット』二幕二場)

バラは夏に咲く花であり、夏はイギリスで一番美しい季節である。その夏の花の代表であるバラは、美しい花の代名詞として使われるが、しかし、王侯貴族の庭で見られない高貴な花ではなく、野バラなど、庶民にも親しまれる花でもあった。とはいえ、どこにでもあるバラを恋人に喩えるなら、それはやはり赤いバラでなくてはならなかった。スコットランドの国民詩人ロバート・バーンズ(*Robert Burns*, [1759-96])の次の詩のように。

Oh, my love's like a red, red rose that newly sprung in June

Oh, my love's like a melody that sweetly played in tune

'A Red, Red Rose'

私の恋人は六月に咲いたばかりの赤い、赤いバラのようだ／お私の恋人は甘い調べのメロディーのようだ。「赤い、赤い薔薇」

バーンズの詩の素朴なバラは野バラのようでもあり、庭に咲く花のようでもある。英国のどこにでもある、よく手入れされた緑の芝生に咲く、一輪の赤い薔薇の花を想像すればよいだろうか。

その他、「病めるバラ (*The Sick Rose*)」(ウィリアム・ブレイク、

1794)⁽⁴⁴⁾、『ナイティンゲールとバラ (The Nightingale and the Rose)』（オスカー・ワイルド、1988）など、バラを扱った文学作品は枚挙の暇がない。十九世紀になるとバラはいよいよ時代の寵児となった。ヴィクトリア女王の時代にはケンティフォール種⁽⁴⁵⁾のバラ、特に苔薔薇⁽⁴⁵⁾が好まれた。二〇世紀も後半になると、バラは民主的になった。英国労働党が一九八六年の労働党会議で、党のシンボルをそれまでの「赤い旗」から「赤いバラ」に変えたからだ。バラが王家の紋章にとどまらず、一般民衆のものとなったことを示すできごとである。

このように英国のバラの歴史をたどってみると、一九九七年に交通事故で亡くなったダイアナ妃の葬儀の折に、人気歌手のエルトン・ジョン (Elton John) が「風の中のろうそく (Candle in the Wind)」という歌で、ダイアナ妃をバラに喩えた理由がうなずける。

Goodbye England's rose

May you ever grow in our hearts⁽⁴⁶⁾

(‘Candle in the Wind’)

さようなら、イングランドのバラ／願わくば我らが心のうちに永遠に咲くことを
 【風の中のろうそく】

国民に人気があったダイアナ妃を、「イングランドのバラ」に喩えるのは、バラの歴史から見ても、英国皇室の歴史からみても、自然でふさわしいことに思われる。

(Ⅳ) バラの革命

【バラの品種】

バラの品種は多い。また簡単に他種と交雑する。それゆえ、バラの品種が幾つあるのか、その分類にはまだ誰も成功していないのだという⁽⁴⁷⁾。植物学上、「種」というのは自然界にある野生種を意味する。しかるに、バラは古くから栽培されている。野生バラ同士が自然に交雑し、また野生バラと栽培バラが自然に交配するだけでなく、人工的な交配が行われ、バラの品種は常に増えていく。人為的に交配して作られたバラを園芸バラとか、栽培バラと呼ぶが、そのような園芸品種（園芸種）にいたっては、果たして幾つあるか、とても数えられるものではない。おそらく天文学的な数字になるだろう。「世界ばら会連合 (World Federation of Rose Societies)」に、名前を登録しているものだけで、約3万種類はあるだろうということである。国によって分類の方法が違っても、バラの分類を困難にする一因となっている⁽⁴⁸⁾。

バラは交配が容易なために、愛好家や育種家の手によって、おびただしい数の新しい品種が作り出されている。それらの花は「ピース (Peace)」「ブルームーン (Blue Moon)」「パパメイアン (Papa Meiland)」などの名前をつけられ、園芸店で売られている。しかし、ここではそのような個々の園芸品種には立ち入らず、ただ、十八世紀末から十九世紀にかけて、そのような園芸品種を生み出す過程に、革命的とも言える大きな変化があったことを指摘し、その変化の意義に

ついて詳しく見ていくことにしたい。「バラ革命」とも言うべきこのできごとには中国から伝えられた野生バラの品種が関わっていた。

「バラ革命以前のバラ」

まず、「バラ革命」以前のヨーロッパにあったバラの品種を確認しておこう。『庭の花木とその歴史 (Garden Shrubs and their Histories)』を描いたアリス・M・コーツと、『植物の起源 (The Origin of Plants)』の著者マギー・キャンベル・カルヴァー (Maggie Campbell-Culver) によると、中世からジョン・ジェラードの時代に至るまでに英国にあったと思われる園芸バラは、次の五つの系統のバラだった。(表3参照)

表3中の「薬剤師のバラ」の別名のあるガリカ・ローズは、学名をローザ・ガリカ・ヴァル・オフィキナリス (*Rosa gallica var. officinalis*) というが、オフィキナリスとはラテン語で「薬剤師」を意味する。このバラは薬草として重宝されていたわけである。また、「キャベツ・バラ」はキャベツの葉のように花弁が多いのでそう呼ばれていた。これをプリニウスのバラの表(表2)と比べてみると、基本的にほとんど変わっていないことがわかる。表3にあるバラで、プリニウスの時代になかったのは、マスク・ローズ (*Rosa moschata*) とケンティフォーリア・ムスコージ (*Rosa centifolia* 'Muscosa') である。

「マスク・ローズ (麝香バラ)」は、シェークスピアの『真夏の夜の夢』にもあるように、蔓バラで、西アジア原産だが、キャンベル・カルヴァーによると、イギリスに入ってきたのは一五九〇年だという。別名

表3：ジョン・ジェラードの時代 (十七世紀) のイギリスのバラ

名前と学名	英語名	色・香り	原産地	英国に伝来した年	用途・特徴
ガリカ・ローズ <i>Rosa gallica var. officinalis</i>	French rose Rose of Provence*	赤・芳香	フランス 南欧・ 西アジア		ポプリ・ジャム 別名「薬剤師のバラ」
マスク・ローズ <i>Rosa moschata</i>	Musk Rose	白・麝香 の香り	西アジア	1590	つるバラ
ダマスク・ローズ <i>Rosa damascena</i>	Damask Rose	芳香 白・ピンク	中東アジア	1573	バラ油
ローズ・アルバ <i>Rosa x alba</i>	White Rose	白	南フランス	1580	ヨーク家の白バラ <i>Rosa canina</i> と <i>Rosa damascena</i> の雑種
ケンティフォーリア・ ムスコージ <i>Rosa x centifolia</i> 'Muscosa'	Centifolia Cabbage Rose Common Moss Rose Provence Rose*	花びらの 数が多い 芳香			苔バラ (モス・ローズ) 別名「キャベツ・バラ」 新参だが、19世紀には 最高の評価を得ていた バラ

Maggie Campbell-Culver, *The Origin of Plants*, p.61. および、
Alice M. Coats, *Garden Shrubs and their Histories*, pp.293-98 より作成。

キャベツ・バラという名前は、テオフラストスやプリニウスの花びらが百枚あるという「百弁バラ」を思わせるが、プリニウスの「百弁バラ」はダマスク・ローズと推定されている（大場説）。アリス・コーツも、キャベツ・バラ、つまり、ケンティフォーリア・ムスコザはダマスク・ローズとは異なり、プリニウスの「百弁バラ」とは別種だと述べている。⁽⁴⁹⁾ 一般に野バラは花弁が五枚しかないが、園芸種は花弁が多い。花弁が多いほど美しいと感じるのが普通だろうから、「百枚も花びらがあるバラ」も「キャベツの葉のように花びらの多いバラ」も、単に理想的なバラを意味するのかもしれない。ガリカ・ローズとケンティフォーリアの別名が共に、プロヴァンスのバラであるのは紛らわしいが（表3*印参照）、どちらの花も香水の原料として南フランスで、ローマ時代から現在に至るまで大量に栽培されていたために混同されるのだろう。プリニウスの時代から薔薇油の材料として盛んに使われていた「ダマスク・ローズ」の、イギリス伝来が一五七三年というのも興味深い。

アリス・コーツとキャンベル・カルヴァーが共に、十七世紀のイギリスには五つの系統のバラがあったと言っているのに対し、大場秀章氏は「ヨーロッパで十九世紀初頭に栽培されていたバラは、わずかに四種だった」と述べている。⁽⁵⁰⁾（表4参照）

ガリカ・ローズ、ローズ・アルバ、ダマスク・ローズ、キャベジ・ローズ (*Rosa centifolia*) まではアリス・コーツ、キャンベル・カルヴァーと同じだが、大場説ではダマスク・ローズが入っていない。キャベジ・

表4：十九世紀初頭のヨーロッパで栽培されていたバラ

名前・学名	英語名	色・香り	原産地	特徴
ローザ・ガリカ <i>Rosa gallica</i>	French rose Rose of Provence	赤・濃ピンク プリニウスの燃えるような赤?	西アジア・ コーカサス 地方	バラ中のバラ 和名フランス・バラ 薬剤師のバラ
ローザ・アルバ <i>Rosa alba L.</i>	White rose	乳白色・ 淡ピンク		<i>R.corymbifera</i> とダマスク・ ローズまたはイヌバラの 交雑種か? ポッチチェリ 「ヴィーナス誕生」のバラ
ダマスク・ローズ <i>Rosa damascena Mill.</i>	Damask rose	八重咲き、 ピンクまたは 白。花は垂れ 下がる。		秋に返り咲くオータム・ ダマスクバラもある*。 ローザ・ガリカと <i>Rosa phoenicia</i> の交雑種。
キャベジ・ローズ <i>Rosa centifolia L.</i>	Centifolia Cabbage rose Provence rose	花びらが多く、 八重咲き		由来がわからない。 15世紀末オランダに生まれ た新しい園芸バラか。

大場秀章『バラの誕生』57頁、および64-91頁より作成。

*オータム・ダマスクはガリカ・ローズとローザ・モスカータの交雑種。

ローズについては、十五世紀オランダに生まれた園芸バラか、として
いるのが、注目される。アリス・コーツはこのバラを「新参者の成り
上りのバラ (upstart)」と呼んでいる。他のバラが少なくとも二千年
年の歴史を持っているのに比べて、キャベジ・ローズはただか四百
年の歴史しかないからだ。いずれにしても、十九世紀初頭までは、ギ
リシア・ローマの時代からあるガリカ・ローズ、ローズ・アルバ、ダ
マスク・ローズに、キャベジ・ローズの四系統、それにマスク・ロー
ズを加えても、せいぜい五系統の栽培バラの他に、もちろん、野生

以上の四系統、あるいは五系統の栽培バラの他に、もちろん、野生
バラの系統がある。イギリスの野生バラは、イヌバラ (Dog rose, *Rose
canina*)、エグラントイン (*eglantine*)、イバラ (*brier*) などだが、大
場氏によると、バラの野生種は世界に一〇〇以上あるという。⁽²²⁾しかし、
それら野バラと古くからあるバラ、その他交雑種、園芸バラも含め、
バラ革命以前のヨーロッパのバラは、すべて一季咲きであった。テオ
フラストスやジェラードがバラと呼んでいた花、シェイクスピアやロ
バート・バーンズが歌ったバラは、一年のうち、夏のほんのわずかの
期間しか開花しなかったのである。バラは花期が短いがゆえに、はか
なく、「間に合ううちに、薔薇の蕾を摘むがいい——ここに咲くこの
花も明日は枯れるのだ」と歌われた。(唯一の例外はオートナム・ダマ
スク・ローズである。これはガリカ・ローズとローサ・モスカータの
交雑種で、秋に返り咲く性質を持っていた)そこに十八世紀の末頃に
なって現れたのが、中国から来た庚申バラ (*Rosa chinensis*) である。

この画期的なバラは四季咲きの性質を持っていた。

中国から来た庚申バラは、欧州では「ベンガル・ローズ (Bengal
rose)」とも「チャイナ・ローズ (China rose)」とも呼ばれた。中国か
らインドを経てヨーロッパにもたらされたので、インドから来たバラ
と誤解されたのである。このバラは、お茶と一緒に中国からインド経
由で運ばれた。ベンガル州はイギリスの東インド会社のあったところ
である。庚申バラの「庚申」とは干支の「かのえさる」のことで、庚
申の日のある月、つまり六〇日に一度は花が咲くという意味である。
このように繰り返し咲く、四季咲き性の品種と交配することによって、
ヨーロッパのバラは現在のように長期間にわたって楽しめるようにな
った。今、我々の身近にあるバラは初夏に花開いた後、(気温さえ高
すぎなければ) 夏中花をつけ、秋にもまた花が咲く。これも庚申バラ
の四季咲きの性質があつて初めて可能になったことである。

また、ヨーロッパのバラは、赤いバラとは言っても、ピンク系ある
いは紫系の赤で、鮮やかな「紅」ではなかった。それは花卉に含まれ
ている「シアニジン3.5-ジグルコシド」という色素(アントシアニン)
のしわざである。この色素は普通ピンクから紫の花色を生じるからで
ある。ところが、中国から来た庚申バラは「シアニジン3-グルコシ
ド」という色素を持っていた。これはピンク系でも紫系でもない、鮮
やかな目の覚めるような赤である。⁽²³⁾この鮮やかな赤いバラの導入によ
り、新しい鮮やかな色のバラを生み出すことが可能になった。つまり、
四季咲きの性質のある、鮮やかな赤色の庚申バラと掛け合わせるこ

によって、これまでにない多彩な、四季咲きの品種を人工的に生み出す道が開けたのである。このようにして、それまで野生種やその枝変わり、自然交配によって生まれた雑種からなる四、ないしは五系統しかなかったヨーロッパのバラに、これ以後、新しく生み出された数多くの系統のバラがつけ加えられることになった。現在、栽培バラの主な系統は三十一系統あり、⁽⁵⁴⁾そこからさらに数多くの多彩な園芸品種が生み出されている。これにはもちろん、交配技術の目覚ましい進歩が背景にあつたことも忘れるわけにはいかない。中国バラとヨーロッパ・バラの人工交配による最初のバラが生まれたのは、一八六七年のことである。⁽⁵⁵⁾この時を境にヨーロッパのバラは大きく姿・形を変え、バラの栽培は、技術的にも、大きな変革を遂げることになった。これはまさにバラ栽培の革命と言うべき出来事だった。現在、バラはこの年、一八六七年をもって二つに大別し、それ以前のバラをオールド・ローズ、それ以後のバラをモダン・ローズと呼んでいる。(続く)

注

- (1) 本稿は二〇〇八年十一月二日に大阪市鶴見緑地公園「咲くやこの花館」で行われたフラワーンサイエティー主催の園芸セミナーで講演したものを、発展させたものである。
- (2) 『園芸植物大辞典』4 (小学館、一九八九) バラの項参照。
- (3) 標準原色図鑑全集7『園芸植物』(保育社、一九八七) 八二頁。
- (4) 大場秀章『バラの誕生』(中公新書、一九九七) 三二二頁。
- (5) Homer, *The Iliad, The World Classics* (Oxford, 1984) translated by Robert Fitzgerald, p.401.
- (6) ホメロス『イリアス』(平凡社ライブラリー、二〇〇三) 四三二―三頁。
- (7) たとえば、Book 2の一行目。Homer, *The Odyssey* translated by Robert Fagles (Penguin Books, 1996), p.93.
- (8) *Greek Lyric I, The Loeb Classical Library* (Harvard University Press, 1982), p.57.
- (9) *Greek Lyric II, The Loeb Classical Library* (Harvard University Press, 1982), Introduction, pp.3-18. Peter Coats, *Flowers in History* (The Viking Press, 1970), p.161.
- (10) 以下の英語版から和訳した。*Greek Lyric II, The Loeb Classical Library*, pp.231-3.
- (11) *Greek Lyric II, The Loeb Classical Library*, p.233.
- (12) http://bob-hair.org/moore_anacreon_idx.htm
- (13) 女性は古典語の代わりに、フランス語や現代イタリア語を勉強した。
- (14) アリストテレス『アリストテレス全集』10「小品集」(岩波書店、一九九九、一九九四) 十五頁。
- (15) *Theophrastus, Enquiry into Plants* (Harvard University Press, 1916, 1968), p.39. 訳は筆者。
- (16) *Theophrastus, Enquiry into Plants*, p.55. 訳は筆者。
- (17) 大槻真一郎監訳『プリニウス博物誌』植物薬劑篇(八坂書房、一九九四) 七四頁。Pliny, *Natural History VI* (Harvard University Press, 1951, 1989), Book XXI, l. 1. p.161.
- (18) 『プリニウス博物誌』九七頁。Pliny, *Natural History VI*, Book XXI, xxx, p.199.

- (19) 『ブリニウス博物誌』七九頁。Pliny, *Natural History* VI, Book XXI, x, p.171.
- (20) Pliny, *Natural History* VI, Book XXI, x, pp.171-3.
- (21) Pliny, *Natural History* VI, Book XXI, x, 20, p.175.
- (22) A・W・ハットフィールド『ハーブの楽しみ』(八坂書房、一九九三年) 八五〜六頁。
- (23) Pliny, *Natural History* XXI, x, p.175.
- (24) Pliny, *Natural History* XXI, xi, p.177.
- (25) P. Coats, *Flowers in History*, p.136. P・コーツ『花の文化史』一六一頁。
- (26) ウィリアム・スミス『聖書植物大事典』(国書刊行会、二〇〇六年)『バラ』の項、および『The Oxford Study Bible (Oxford, 1992)』およびP・コーツ『花の文化史』一三六頁参照。
- (27) P. Coats, *Flowers in History*, p.163. P・コーツ『花の文化史』一三九頁。
- (28) 三谷康之『イギリスの窓文化』(開文社出版、一九九六年) 七九〜八三頁。
- (29) 大場秀章『バラの誕生』、六七〜八頁。
- (30) 『新カトリック大事典』「黄金の薔薇」の項。春山行夫『花ことば』一二二〜四頁。
- (31) P. Coats, *Flowers in History*, p.163. P・コーツ『花の文化史』一三九頁。
- (32) <http://www.welcometoyork.co.uk/minister2.html>
- (33) Sylvia Landsberg, *The Medieval Garden* (British Museum Press, 1995), see Chapter 2.
- (34) 『はじめて学ぶフランス文学史』(ミネルヴァ書房、二〇〇二) 一三三〜七頁。
- (35) John Gerard, *The Herball or General Historie of Plants*, Book3, p.1077.
- 原文は以下の通り。The plant of Roses, though it be a shrub full of prickles, yet it had beene more fit and convenient to have placed it with the most glorious flowers of the worlde, than to insert the fame here among base and thornie shrubs: for the Rose doth deserve the chiefest and most principall place among all flowers whatsoever being not onely esteemed for his beautie, vertues, and his fragrant and odoriferous smell; but also because it is the honor and ornament of our English Scepter, as by the conjunction appeereth in the uniting of those two most royall houses of Lancaster and Yorke. (sic)
- (36) A・アンダーソン『花々との出会い』九七〜一〇二頁。ODNB, see John Gerard.
- (37) たとえば、実を結ぶところから黒雁 (baracle goose) という鳥が飛び出す、伝説上の木 (バーナクル・ツリー) が実在すると断言する記述がある。
- (38) バラはよく英国の国花だと言われるが、イギリスはイングランド、ウェールズ、北アイルランド、スコットランドから成り立っており、それぞれが国花を決めている。北アイルランド、スコットランド、ウェールズの国花はそれぞれコマツツメクサ (shamrock)、『アザミ』(histle)、『ラッパ水仙』(daffodil) であり、バラはイングランドの国花である。
- (39) A・アンダーソン『花々との出会い』七四頁。Maggie Campbell-Culver, *The Origin of Plants* (Transworld Publishers, 2004), pp.133-134.
- (40) Alice M. Coats, *Garden Shrubs and their Histories* (Vista Books, 1963), pp.292-3. A・アンダーソン『花々との出会い』七五頁。
- (41) 現在もロンドン塔のヨーマン衛士の制服などに使われている。
- (42) 中尾佐助『花と木の文化史』(岩波新書、一九八六) 六八〜九頁。
- (43) 同じ主題の詩がこの時期に多く書かれている。たとえば、Edmund Spenser *The Faerie Queene* (1590-96, 1609) ② II, XII:74-5^b 一般に『The Song of the Rose』と呼ばれている箇所などが挙げられる。
- (44) William Blake, *Song of Experience* (1794).
- (45) 苔バラ (Moss rose) はケンティフォリア種の一種で、萼に小さな棘が密集して生え、苔のように見えるところからそう呼ばれる。
- (46) この歌の全文は以下の通り。

- Goodbye England's rose
 May you ever grow in our hearts
 You were the grace that placed itself
 Where lives were torn apart
 You called out to our country
 And you whispered to those in pain
 Now you belong to heaven
 And the stars spell out your name
 (Chorus)
 And it seems to me you lived your life
 Like a candle in the wind
 Never fading with the sunset
 When the rain set in
 And your footsteps will always fall here
 Along England's greenest hills
 Your candle's burned out long before
 Your legend ever will
- この歌はエルトン・ジョンがマリリン・モンロー (Marilyn Monroe) のために作った歌を、ダイアナ妃の突然の死に合わせて改作したものである。
 'Goodbye Norma Jean' の部分が、'Goodbye England's rose' と改められた。(Norma Jean はマリリン・モンローの本名)
- (47) 大場秀章『バラの誕生』四四頁。
 (48) 日本ばら会『はじめてのバラづくり』(成美堂出版、二〇〇一年) 四頁。
 (49) Alice M. Coats, *Garden Shrubs and their Histories*, p.297.
 (50) 大場秀章『バラの誕生』五七頁。および六四〜九一頁。
 (51) Alice M. Coats, *Garden Shrubs and their Histories*, p.297.
- (52) 大場秀章『バラの誕生』五六頁。
 (53) 御坐由紀「赤いバラの起源」NHKテレビテキスト『趣味の園芸』二〇〇九年五月号、三七頁。
 (54) 日本ばら会『はじめてのバラづくり』七頁。系統図参照。
 (55) 一八〇〇年とする説もある。大場秀章『バラの誕生』九七〜八頁参照。

参考文献

- Oxford Dictionary of National Biography*. Oxford University Press, 2004.
 Taylor, Patrick. *The Oxford Companion to the Garden*. Oxford, 2006.
The Oxford Study Bible: Revised English Bible with the Apocrypha. Oxford University Press, 1992.
 『園芸植物大辞典』4 (小学館、一九八九年)
 標準原色図鑑全集7『園芸植物』(保育社、一九八七年)
 旧約聖書 日本聖書協会(三省堂、一九五五年)
 『新カトリック大事典』(研究社、一九九六年)
 『聖書植物大事典』ウィリアム・スミス著(国書刊行会、二〇〇六年)
 Anacreon. *Greek Lyric I, The Loeb Classical Library*. Harvard University Press, 1982.
 Campbell-Culver, Maggie. *The Origin of Plants*. Transworld Publishers, 2004.
 Coats, Alice M. *Garden Shrubs and their Histories*. Vista Books, 1963.
 Coats, Peter. *Flowers in History*. The Viking Press, 1970.
 邦訳：ピーター・コーツ『花の文化史』安部薫訳(八坂書房、一九八五年)
 Gerard, John. *John Gerard: The Autobiography of an Elizabethan*. Family Publications, 2006.
 —— *The Herball or General Historie of Plants*. London, 1597; Amsterdam, Theatrum

- Obis Terrarum, 1974.
- *Gerard's Herbal: Selections from the 1633 Enlarged and Amended Edition*.
Velluminous Press, 2008.
- Hatfield, Audrey Wymne. *Pleasures of Herbs*, 1964.
- 邦訳: A・ハットフィールド『ハーブの楽しみ』(八坂書房、一九九三年)
- Hobhouse, Penelope. *Plants in Garden History*. Pavilion Books, 1992, 2004.
- Homer. *The Iliad* translated by Robert Fitzgerald. *The World Classics*. Oxford, 1984.
- 邦訳: ホメロス『イリアス』呉茂一訳(平凡社ライブラリー、二〇〇三年)
- *The Odyssey* translated by Robert Eagles. Penguin Books, 1996.
- Landsberg, Sylvia. *The Medieval Garden*. British Museum Press, 1995.
- Pliny. *Natural History* translated by W. H. S. Jones. Harvard University Press, 1951, 1989.
- 邦訳: プリニウス『プリニウス博物誌』植物薬剤篇、大槻真一郎責任編集(八坂書房、一九九四年)
- Sackville-West, Vita. *In Your Garden*. Oxenwood Press, 1951, 1996.
- Sappho. *Greek Lyric I* translated by Campbell, David A. *The Loeb Classical Library*.
Harvard University Press, 1982.
- Theophrastus. *Enquiry into Plants* translated by Sir Arthur Hort. Harvard University Press, 1916, 1968.
- Uglov, Jenny. *A Little History of British Gardening*. Pimlico, 2005.
- アリストテレス『アリストテレス全集』副島民雄・福島保夫訳(岩波書店、一九六九、一九九四年)
- 大場秀章『バラの誕生』(中公新書、一九九七年)
- 御坐由紀「赤いバラの起源」NHKテレビテキスト『趣味の園芸』二〇〇九年五月号
- テオフラストス『植物誌Ⅰ』西洋古典叢書 小川洋子訳(京都大学学術出版会、二〇〇八年)
- 中尾佐助『花と木の文化史』(岩波新書、一九八六年)
- 日本はら会『はじめてのバラづくり』(成美堂出版、二〇〇一年)
- 春山行夫『花ことば』(平凡社、一九九六年)
- 三谷康之『イギリスの窓文化』(開文社出版、一九九六年)
- 宮澤政男・野村和子『薔薇空間——宮廷画家ルドゥーテとバラに魅せられた人々』(ランダムハウス講談社、二〇〇九年)
- 湯浅浩史『花の履歴書』(講談社学術文庫、一九九五年)
- 横山安由美・朝比奈美知子『はじめて学ぶフランス文学史』(ミネルヴァ書房、二〇〇二年)

The Origin of Roses :
A Brief History of the Culture and Cultivation of the 'Flower of Flowers'

Mari NAKAO

This paper is intended as the first part of a history of roses which will include their cultivation and the cultures surrounding roses in both the western (Britain and Europe) and eastern (China and Japan) parts of the world. European old roses, especially those in Britain, are treated here and the rest will be taken up in the next issue.

In Greek and Roman eras, roses were used in medicine, for their oil and their petals. Under Christianity, roses gained a mystical meaning and were used as religious symbols. In Britain, a rose was chosen as the emblem of England and the strife between the two royal houses of York and Lancaster is known as the Wars of the Roses. Roses, however, have been much loved by ordinary folks, too. And poets such as Shakespeare and Burns, praised them in their memorable lines.

Roses easily hybridize. But in spite of their long history of cultivation, until the 19th century, the number of species of garden roses had not changed since the days of Theophrastus and Pliny. There were five ancestor roses in Europe, the *Rosa gallica*, *Rosa alba*, Musk rose, Damask rose and *Rosa Centifolia* (cabbage rose). The arrival of the repeat-flowering China rose at the end of the 18th century revolutionized rose cultivation in Europe.